

本多静六通信

第 6 号

発行
本多静六博士
を記念する会

本多静六博士の手帳

埼玉県農政課長 三浦 進
(現・水産庁漁政部漁政課課長補佐)

本稿は平成七年六月に「埼玉自治」(埼玉県自治研究会編)に掲載されたものを、ご本人の了承を得て掲載したものです。

最近、一橋大学の野口悠紀雄教授の「『超』整理法」『統』整理法・時間編」という本が、ベストセラーになった。

私も、情報整理のノウハウには従来から関心を持っていたので、目を通して見たが、大いに得るところがあった。

このうち「統」の方では、時間の管理という観点から手帳について論じられており、大変参考になるのだが、こと手帳に関しては、より強く啓発された本が別にある。本多静六博士の「わが処世の秘訣」という本がそれである。

本多静六博士については、「埼玉自治」の読者であれば良くご存じだと思いが、慶応二年(一八六六年)本県菖蒲町生まれの林学者で、

我が国最初の林学博士であり、東京の日比谷公園の設計者としても知られている。

博士は、専門書のほかに多くの一般教養書を残されており、「わが処世の秘訣」もその一つである。

この中で博士は、御自身の手帳の利用法を紹介されているが、それによると、手帳本体はルーブリーフ式のものを用い、「カレンダー」(当用(当面の要処理事項))「修養(自分自身を守るべき注意事項や金言)」「資料」など八項目(※下段参照)に分けて記載し、随時差し換えるときの手帳と同様の方法である。

私も、十年前前にバインダー式の手帳を使ったことがあるが、その際は十分活用できなかった。

ここ数年は、ダイアリー、住所録、メモ帳の三冊を持ち歩いていたが、かなりかさ張り、また、メモ帳に書く事項が雑多となつて、博士の言われる「当用」「修養」「資料」等が混在し、後で検索がしにくく、不便を感じていた。

そのような折に博士の方法を知り、早速私流

にアレンジして採り入れ、この一年ほど使っているが、現在の仕事の質や量などと合っているのか、非常にうまく機能している。

もちろん、手帳の使い方を真似たからといって、博士のような立派な業績を残せる訳ではないが、手帳の使用法をはじめとして、少しでも見習えるところは見習って、仕事の仕方や日常生活の改善・向上に結び付けていきたいと思っている。

なお、「埼玉県民手帳」も常時鞆に入れて携帯し、コンパクトな資料・便覧として活用していることを申し添えておきたい。

- 1 修養 とくに自分の欠点と自分の守るべき注意と金言とを記入する。
- 2 残用 為そうと欲した古い問題で、まだ成し遂げ得なかったものを記入する。
- 3 カレンダー たいてい順次に半年分ずつカレンダーを記しおき、日付の下に出張、諸会その他を、約束すると同時に記入し、毎朝これを見ることにする。したがって約束の衝突や、約束を忘れるなどということは絶対ない。
- 4 当用 為すべき用事を、気づくたびに順次記入しておき、それがすめばその行を消してゆき、寝る前までは消さない行はなくする。しかもそれが大問題か、または時期に関する仕事で、急になし果たすことのできないものは、時々これを2の残用に移して記入する。
- 5 日記 他日の参考となる重要な点だけ記入する。
- 6 資料 自分の専門(山林、公園、経済)と、修養、一般資料の数種に分ち、新聞雑誌や著書を読んだり、人の説を聴いたりする間に、その重要とする部分をそれぞれ部分けた紙に記入しておき、後にこれを分類して保存する。
- 7 会計 収支をそのつど記入し、月末ごとにこれを計算する。
- 8 宿所書 これは別にカード式の宿所書の台帳があるから、ここには日用の人または変更した分だけを記入する。
(「わが処世の秘訣」より抜粋)

本多静六先生追想記(二)

— 直弟子から見た偉人像 —

東京大学名誉教授 農学博士 嶺 一二一



で、手当てを出してやるという有難い申し出があった。

すでに述べたように、私は講義の際に先生の説に異論を時々発言して困らせた生意気な学生であったし、造林学教室で論文を書いた同級生の中に佐藤啓二(後の九大教授、森脇龍雄(後の

東京都緑地公園部長) 両君のような優秀で人柄もよい人材があるのに、両君は資産家の子弟であるが、私は父が政治に私財を使い果たし、育英会の給費で大学を卒業したという話に同情

されて、私に援助をしてやろうという先生の度量の大きさに感動し、講座担任右田教授のお許しを得て、毎週二回の午後に帝国森林会に通つて、助手として手伝いをするようになった。

帝国森林会は、大日本山林会の事業を援助する目的で、財界に知人が多い本多先生が寄付を集めて組織された財団法人で、その仕事は先生の信頼の厚い鈴木清次氏が担当し、若い斎藤、近藤両君が先生の著述や講演の原稿清書や資料の整理を担当し、私もその手伝いをするようになった。

先生は満二十五歳の九月から「一日一頁」分の

の文章(三十二字詰十四行)を書く決心をされ、旅行や病気で休んだ時は、後日その分は取りかえず努力を続けられていた。

そのために、毎日読まれた著書、新聞雑誌、テレビ・ラジオ、聞いた講演や人の話などと先生自身の着想や見聞で役に立つと考えられることは、直ぐメモを取られてそれを清書させ、また切り抜き保存をして他日に利用する資料とされていた。

最初のメモは、広告の裏やノートの切れ端、保存の必要のない手紙の裏などに書かれたものを助手が整理するのである。

率直に言つて、先生の字は達筆ではなく判読



△東京山林学校時代に、実兄折原金吾に宛てた博士の手紙。近況報告がぎっしり書き込まれている。(明治21年9月26日)

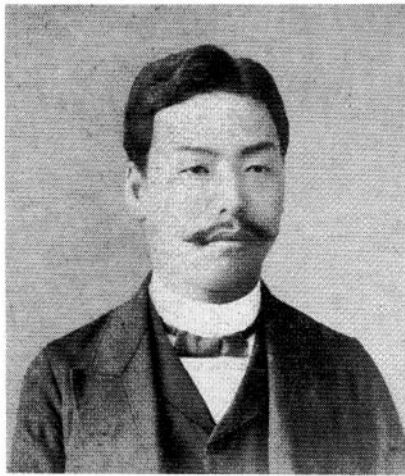
本稿は、平成五年十一月二十五日、本多博士の母校三箇小学校において、本多博士の胸像除幕式並びに開校百二十周年式典が行われた際、嶺先生より特別寄稿されたものを再編集したものです。
当会では、嶺先生にご了解をいただき、改めて本通信に掲載するものです。
なお、「自序」「講義・実習・指導旅行」は通信第5号に掲載してあります。

二 帝国森林会の助手時代

昭和二年、本多先生は東京帝国大学教授を停年退職されて、帝国森林会々長として赤坂溜池三会堂にあった事務所へ毎日出勤されていた。

同年に東大を卒業した私は、大学院に進学して、演習林嘱託として月給七〇円を支給されて、森林経理学教室の事務を手伝うことになった。

この事を報告がてらお礼に帝国森林会の会長室に先生を訪問したところ、先生から助手として週二回午後帝国森林会へ手伝いに来る条件



△東京農科大学助教授時代の博士（明治26年頃）

し難かったので、私は斎藤・近藤両君が作られた先生の字の判別表を借用したこともあった。あれ程努力家の先生が、習字の稽古をされなかつたのは不思議であるが、専門の勉強に専念された為か掛軸、額、色紙などの揮毫は固辞され、記念碑の字も東北線野辺地駅構内に建っている鉄道防雪林の碑以外に私は見たことがない。序ながら、鉄の研究の世界的権威者の本多光太郎先生も、一切の揮毫を謝絶されていたと承り、碩学本多両先生の共通性を感じ入った次第である。

先生の服は、簡素な詰襟で有名であった。最初はドイツ留学時代の制服を持ち帰ったのが始まりと聞くが、特別に注文して作られた霜降りサージの夏服で、表の上下、裏や背中にもポケットが着いていて、財布や書類の他頂戴物を包む風呂敷の代用にもなると自慢して、通勤にも旅行にも常用して居られた。

夏冬兼用で、寒い冬は下着を重ねて、汗ばんだら上下を取りかえると、健康によい上に汗のついた下着は上に着ると体温で乾く、また服は土曜日の晩に洗濯をすれば、月曜日には乾いた服が着られると、若い連中に進めて居られたが追隨者はなく、先生の専売特許のように有名であった。

私は旅行用に、この方式の服をあつらえたが、口の悪い友人に万引に便利な服とひやかされたことがあった。私も本多先生も万引は絶対にしたことが無いことを念のため表明しておく。

帝国森林会の助手時代に、受けた教訓は数多いが、最も重要なことは昭和四年の樺太調査旅行と、昭和八年の樺太拓殖調査委員会に随行した時のことであるから、それを記述した後で、総括して述べることにしたい。

三 樺太調査に随行して

昭和四年に、王子製紙株式会社社長で帝国森林会副会長の藤原銀次郎氏から本多先生に樺太の調査に行つて頂きたいという依頼があった。

樺太では大正八年から十二年にかけて、トドマツ・エゾマツのカラフトマツカレハ（俗称松毛虫）による被害は、二十二万町歩、八、八四五万石に達する日本林業史上空前の大惨状を呈し、その被害木が、折柄の関東大震災の復興用材に使われるようになったため、正規の伐採の他に、便乗した利権屋が不当な払下げを申請し

て、乱伐や大規模な盗伐、誤伐が頻発していることは半ば公然の事実であった。

正規の払下げや購入をしない材を漂材（海岸や沿岸で拾い集めた材）と称して貨物船に満杯の木材を内地の港に運んだという噂話が伝えられた時代である。

何しろ樺太庁が公表した統計書に島内森林伐採量の数字よりも、島内消費量と屋外移輸量の合計数字の方が大きく出ており、その上に統計に計上されない木材が流通していることも明白で何とも奇怪な状態であった。

伐採跡地検査は形式だけで、時に厳格な検査が行われそうになると、原因不明の山火事が発生して、周囲の原生林まで延焼する例も多く、このままでは樺太の森林は遠からずして消滅する危機にあった。

樺太に大きな製紙工場を経営されていた王子製紙の藤原社長が、国家のために本多先生に現状を調査をして政策を改善するよう政府と樺太庁に警告していただきたいと依頼された訳である。

本多先生は、私を助手として随行を命ぜられ、当時林政史を研究中の徳川宗敬氏（伯爵、後の全国林業経営者協会会長、神宮大宮司その他要職を歴任され、平成元年九十一歳で逝去）が一部の期間同行された。

樺太へ渡る前に、北海道を林駒之助氏の案内で視察した。林氏は本多先生と大学同級生で、北海道の森林も一時は拓殖のためと利権屋の手



△東京帝国大学農科大学教授時代の博士（○印）

で乱伐されていたのを防いだ功勞者で、旅行の際は弁当持参で訪問先から一切の饗応を受けず、如何なる上位や高官の命令でも、利権的な私下げを拒否した硬骨漢として有名な方であった。雄弁家の先生と寡黙な林氏は、多くを語り合われなかったが、胸中樺太林業政策の改善の秘策は通じあったかと推察する。

稚内から大泊へ通う連絡船の船内の中のことである。藤原社長は一等へ乗るように勧められたが、先生は贅沢だと二等へ乗船されたので、客室は広間になっていて定員通りの客が一緒に乗っていた。

その時先生は、西式健康法の西勝造氏の本を讀んで居られて、人間は他の哺乳動物のような匍匐状態から直立して歩くようになって、知能は発達したが内臓は下垂して機能が低下して居るから時々四つんばいになって、はって歩くと健康によいと書いているのに共鳴して、徳川君も嶺君も四つんばいで歩くと命令された。

華族の徳川さんは苦笑して従わなかったが、助手の私は命令に従わざるを得ない。巨体の先生の後ろに小男の私が、親熊のあとに子熊がついて歩くような格好で船室内をはって歩くので、同室の婦人子供の失笑をかったが、よいと信じたことは直ぐに実行して他人にも勧める先生の勇氣の一面である。

樺太では、役所や会社を訪ねて話を聞き資料を集め、森林や伐採跡地を調べたが、その間に敷香で幌内川の対岸にあるギリヤーク・オロチヨンなど旧土民の集落のあるオグスの杜を訪ねたことがある。

粗末な丸太小屋が並んでる中に、一段と大きなロッグ・ハウスに住んでいるのはウエノコロフという酋長で、娘に日本人の婿をさがしているという噂で、同行者の中で独身は私だけであったので、先生は婿に立候補してどうかと冗談を言われた。

盛夏というのに、黒てんの毛皮の襟巻きをして盛装した娘はフレップのジャムなどでもてなしてくれたが、先生が私を婿に推薦されなかったので、ほっとした。

その後彼女は、学校の先生の日本人と結婚したと聞いたが、戦争が始って父親がソ連のスパイの疑いで取調べを受けたと聞いて驚いた。国境には敷香から自動車で行き、途中保恵の九大演習林事務所泊まる予定であったが、少し早く着いたところ、先生は天気がいのでこれから国境へ行くと言いだされた。

御馳走を作って待つて居られた演習林当局や案内の樺太庁の役人の困惑を考えて、同行されていた中村賢太郎先生（本多先生の直弟子で後の東大教授、当時学位論文の資料調査のため樺太滞在中であった）が世話役の方々に迷惑をかけるので、予定を急に変えないよう勧告されたが、本多先生は「明日ありと思う心のあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものは」の古歌を持ち出して一步も譲られない。

結局、先生の樺太庁の案内の方と私が同乗して、国境へ向かうことになり、他の方々は保恵に泊られた。

車はエンジンがオーバー・ヒートするのを谷川の水で度々冷やして、漸く北緯五〇度の日露国境に到着した。夕方なのでロシアの警備兵の姿は見えず、記念写真をとって引返した。その晩は半田沢の駅亭で一夜を明かして翌日国境を視察された一行と合流した。

このように、その日にできることは、明日にのばさないで済ませるのが先生の流儀で、たとえ夜の十一時か十二時に仕事が残って、次の日の午前中他の用事がない場合でも、その夜のう

ちに仕事を片づけて安心して熟睡をした方が体のためによいと、我々を警められていた。

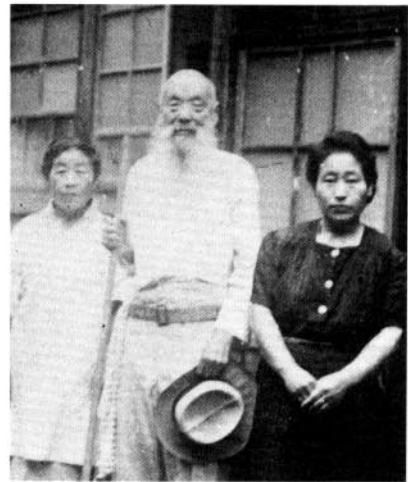
旅行の場合に、視察の時間や宿泊の場所を予め決めると、行動が拘束されるので自由におくよう希望された。その代わり食事や宿は粗末でもかまわないと言っておられた。

しかし、このような申し出は本多先生のような偉い方には相手も仕方なく容認するが、普通の人の場合には相手が承知されないことが多いし、戦中戦後の諸事窮屈な時代になると、先生もこの流儀を通すことが無理だと覺られて、晩年は自説を固執されなくなったが、壮年期には、これをおし通された。

この旅行中、先生は現場では案内者の説明を聞かれるだけで、批判をしたり詰問などなさらなかった。臍(へそ)に疵(きず)を持つ者もほととしたようであったが、それは先生の深謀遠慮であって、責めるべき点はしっかりと頭に入れて、先生が帰られた後に私だけ残って詳しい調査をするように命じられた。

私は先生の指示を忠実に守って、今度は案内者を頼まないで、身分もかくして単身でいろいろの人に会って真実を探求することに努めた。

その結果をまとめて、私が提出した報告書を帝国森林会は「樺太の森林及林業(樺太森林政策改革論)(昭和五年二月)」という印刷物を刊行し、貴衆両議員ほか関係方面に配布して、樺太森林行政の改革について政府の努力と世論の喚起に努められた。



△晩年の博士(埼玉県大滝村で、昭和25年7月)

この本は、本多先生自身の著書として発表されてもよいのに、私の執筆であることを明記して、帝国森林会の名で公刊されたことも、先生の度量の大きさを証明するもので感激している。この樺太旅行中に、先生から教えられたことや感じたことは、沢山あるがそれは後まとめて述べることにしたい。

(今回は、「四 樺太拓殖調査委員会の思い出」と「五 私が受けた教訓と感銘の数々」を掲載します)

著者紹介

明治三十七年十月一日生まれ。福岡県出身。旧制五高を経て、東京大学農学部林学科を昭和二年に卒業。東京大学講師、助教、教授を歴任。昭和四十年三月定年退職。名誉教授の称号を受ける。その間、帝室林野局出仕、国立林業試験場経営部長等を兼務。東大退職後、東京農業大学教授に就任。昭和五十年三月定年退職。農学博士。

博士が手掛けた各地の公園(三) 釧路・春採公園(二)

ここで大正五年当時の新聞から、春採公園調査中の博士の逸話をいくつかご紹介したい。

・ 本多博士は早起きで、釧路に滞在中も午前四時に起床、六時には宿を出た。これには朝の早いので有名な林田町長も面食らった。

・ 調査中、運動会の真似をして遊んでいた子供たちを見掛けた博士は、隊長らしい年嵩の子供を呼び寄せ、持っていたお菓子を運動会の賞品にしなさいと全部手渡した。そして子供は最も遊びやすい場所を選ぶのだから、この場所を子供の運動場にしよう提案した。

・ ガラスの破片で怪我をした子供を見付けると、自ら傷口を拭いてやり、包帯を施して帰してあげた。などの逸話が新聞から読み取れるが、いずれも博士の人情が出ており興味が尽きない。



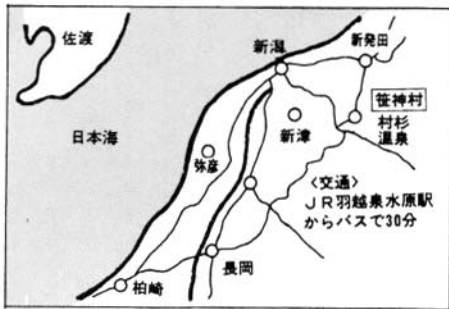
この後、昭和十二年には、博士によりさらに改造計画が施され、公園面積はさらに拡張し、いよいよ充実した内容となった。しかし残念なことにその後の戦争は経済不況をもたらすについにこの計画は実現することなく、幻の計画として役目を終えたのである。今ある春採公園は、規模こそ当初の計画と比べ小さいものの、本多博士が設計に携わった貴重な公園といえるものである。

本多博士、新潟県笹神村 村杉温泉の発展策を論じる

菖蒲町企画課 渋谷 克美

有志の強い働き掛けが実り本多博士を招聘
新潟市から車で真東に約一時間。五頭山麓に広がる笹神村は人口約一万人の豊かな自然に囲まれた村である。昭和三十一年に当時の笹岡村と神山村が合併し、今日の笹神村が誕生した。丘陵地帯から平野に広がるこの村は、肥沃な大地と地理的条件によって、古くから豊かな文化を育み、多くの文人・俳人を排出してきたことでも知られている。

この笹神村（当時笹岡村）の村杉温泉に、本多博士が最初に訪れたのは大正八年のことである。笹神には村杉温泉をはじめ、出湯温泉、今



板温泉と三つの温泉があり、これらをまとめて五頭温泉郷と呼んでいる。これらの温泉街は、古くから湯治場として栄えていたが、中でも村杉温泉はラジウムを多量に含むという特質があ



△村杉温泉を視察する本多博士（写真中央）

った。その効能を生かした新たな温泉の発展策

を、という当時の有志の強い働き掛けが実り、当時公園設計の第一人者であった本多博士が招聘されたものと思われる。
博士は大正八年から十年にかけて村杉を訪れ、幾度か実地調査を繰り返した後、その発展具体策として、大正十年六月十六日、村の温泉場において「村杉ラジウム温泉風景利用策」と題する講話を行った。

村杉温泉の三つの特徴を生かしたまちづくり
博士は先ず講話の中で村杉温泉の三つの優れた特徴をあげ、これらをいかに有効に利用するかが発展の鍵を握ると言い放った。その一つが「多量のラジウムを含有する温泉」であり、一つが「広大な松林」、一つが「清麗なる溪流・豊富なる水」である。

博士はこれらの三要素を有機的にかつ効果的に利用できるよう、村杉温泉全体を公園として整備するよう提言し、「村杉遊園地計画平面図」にその概要を記した。

具体的にはモーターリゼーションの到来を想定した回遊道路の整備、若者向けの登山路、一般向けの散歩道の整備、風致林の整備、展望台・東屋・ベンチ・トイレ等の公園施設の設置、加えて運動場、動物園、植物園、水浴場の整備などである。さらに細かい点では屑籠や案内図、指導標の設置、名物の発掘、豊富な水を使った水力発電施設の整備などが上げられる。

結びに博士は、「村杉公園設計の要旨」とし

て、「(前略)一般に地方風を帯び、質素にして田舎風の所ありて、華々しからざる所が多くは永続きするものである。徒に多大の経費を投じて華美なる設備をなし、或いは活動写真とか、或いは芝居とか種々の設備あるところは一時は盛なるも、必ず盛衰あるものである。これらは金力を以て模倣し得るものであって、何処にても造り得るが故である。故にその土地の特徴を利用して金銭を以て模倣すべからざる自然的にもたらしむるを要す。かくして一般にこの土地を清浄ならしめ、前述の諸設備をなし、漸次改良を加ふるにおいては、本土地の繁栄期を待つべきものである。(後略)」と述べている。

今また、新たに始まる村杉温泉のまちづくり
平成六年十一月、村杉温泉を訪問する機会に恵まれた。事前に村役場に資料を送り問合せたところ、今の村杉には、大正時代に博士が設計した公園らしきものは見られないし、また公園計画そのものがあつたことも知られていないとのことであつた。

しかし、資料は年代的には古いものの、語られている内容は新鮮かつ普遍的なものである。早速、笹神村教育委員会の方のご配慮により、村杉温泉に資料を転送していただいた。

村杉温泉では、角屋旅館の安永俊さん、旅館あらせいの荒木清隆さん及びご尊父様、長生館の荒木善紀さんの四人の方にお会いしお話しを伺うことができた。荒木清隆さんのお父さんを



△左から安永さん、荒木(清)さん、荒木(善)さん
除く三人の方はい
ずれも三十代半ば
の方で、旅館組合
青年部の中心とな
つて、村杉温泉の
発展を考えている
方である。そのた
め殊の外、本資料
に強い関心を示さ
れ、「今私たちが
取り組もうとして

いることが、七十年前に語られていたとは」と驚きを隠せない様子であつた。

また、清隆さんのお父さんのお話しによると、公園施設の一つであつた川を利用した水浴場については、実際に造られたが、川下の住民の反対により取り壊さざるを得なかつたこと等の、公園造成を裏付ける貴重なお話しも伺うことができた。さらに当時本多博士が宿泊した旅館還翠楼さん(へも)案内をいただき、当時の博士の写真(六頁参照)も拝見することができたことは大きな収穫であつた。

七十数年前、村杉の有志の力により作られた「村杉ラジウム温泉風景利用策」は時を越え、今また新たに地域の若い人々に受け継がれようとしている。

結びに、今回の調査に当たりご協力を頂いた笹神村教育委員会の北上様、村杉温泉青年部の皆様はじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。



昔ながらの落ち着いた▷
雰囲気をもつた村杉温
泉



◁博士が村杉温泉帯在中利
用していた旅館・環翠楼



青森県野辺地町

日本最古の鉄道防雪林で

ジャズコンサート

野辺地町教育委員会
社会教育課長 古田 力也

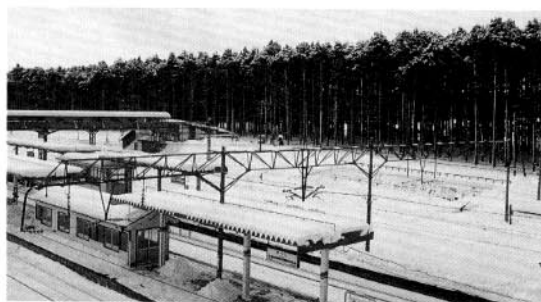
去る平成七年六月三十日、青森県野辺地町にある鉄道防雪林においてジャズコンサートが開かれました。この催しは、「防雪原林を新たな観光資源に育てよう」と同町の有志の働きかけにより今回初めて行われたものです。防雪林が縁となり菖蒲町と交流が続いている野辺地町の古田さんからお便りをご紹介します。

青森県野辺地町にあるわが国最初の鉄道防雪林「野辺地鉄防雪原林」で、このほどジャズコンサートが初めて開かれました。

自分たちの手で防雪林をPRしようという町



民の有志が主催したものです。新進気鋭のギタリスト・河越重義率いるバンド「ムーキー・ドゥーキー」がエネルギッシュな演奏を披露し、会場を埋



△野辺地駅構内にある鉄道防雪原林

め尽くした大勢のジャズファンを沸かせました。

野辺地防雪原林は、列車の運行を妨げる吹雪や吹きだまりを防ぐために、埼玉菖蒲町名誉町民本多静六氏の設計で明治二十六年、日本で初めて設置されたものです。

鉄道記念物に

もなっている防雪林で、平成五年には造林百周年を迎え、林内に記念の小公園もできました。

「何かイベントを開いて町が全国に誇る防雪林をもっとPRしたい」と、JR野辺地駅の高橋俊一駅長と町おこしのため毎年同町でジャズコンサートを主催する船橋玲さんが話し合った結果、今回初めてコンサートを開くことになったものです。

この企画に駅前商店会も趣旨に賛同し、全面的にバックアップしました。

コンサートは、小公園で午後七時から始まりました。防雪林はグリーンのライトアップが施され、暗くなるにつれて幻想的な雰囲気を出しました。

席上、埼玉菖蒲町の遠藤淳二町長よりメッセージが届き、野辺地町小坂郁夫町長より紹介されました。

コンサートは、約二時間にわたってパワフルな演奏を披露。「A列車で行こう」などのスタンダードナンバーや、主催者からリクエストされた「野辺地音頭」などが繰り広げられ、大勢の観客を魅了しました。

編集後記

樹齢四百年とも推定される、博士ゆかりのサイカチの木が、生家・折原家の菩提寺幸福寺の山門跡にある。既に本体は骸化しているが、確認される残骸を計測すれば、根元周長は八米にも及ぶ。枯れ残る表皮部から二世が蘇生し、その幹周は一・九米、高さ六米、枝幅・東八米、西九米、南六米、北七米、周囲は墓地の造成で根系は約十六平方米、昨今枯れ枝が認められる。古老の話によると、博士は子供の頃よくこの木に登り、小鳥の巣から卵をとったり、洞の中で遊んだりしたという。因みに博士は刺は下の方に生え、巣のある上の方にはないことを見抜いておられたのだと考えられる。

往時の博士を偲ぶこのサイカチの木は、今や全国的にも珍しい木となりつつある。この木の保存は、博士の顕彰にもつながるものである。

【編集発行】 本多静六博士を記念する会
〒346-01 埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字新堀
三十八番地 菖蒲町役場企画課内
電話 〇四八〇(八五)一一一一(代表)